

真 生

第 二 卷 十 一 號

◆如何なる場合にも生ける宗教は自分をして常に價値ある生活に立たしめねばやまぬものである。然るに此度の大震災災に於て私共の生活はごこまで價値行為に生きたであらうか。

◆口でこそ慈悲といひ愛といひ乍らにも、私共は果してどれほどの慈悲と力とに生きたのであるか、靜かに想へば尙爲すべきの多くを發見せらるゝではないか。

◆而も夫は過去に於ける私共の行ひばかりではない。來るべき社會に對して今どれだけの愛と道との心を以て私共は其の實際にふれてゐるのであらうか。それは直に其の人の信仰の深さを示すものである。

◆而て此の心なきものゝ信仰は其の實は信仰の如くに見えても眞の信仰ではないのである。夫れは貪慾あくなき自己の私慾が道德的世界を見かぎつて、極樂の如くに見ゆる所の餓鬼の世界に外ならぬ宗教である。いはゞ一種の迷信である。

◆永遠の生命と無限の向上とに生きん我が友よ、私共はいつも此の神聖なる人生の行路を反省して常住に向上の一路をたどるべきではあるまいか、日々夜々に如來の慈光に生きるといふことは即ち此の價値の光明に生きることにならぬ。(念)

△三種の經濟

○近頃の人々は所謂物質經濟に就て知るところは多い、けれども、未だ物質經濟の價値的人格の方面を知らない。從て經濟の爲めには自己の人格をも賣るのである。

○而て時間の立つのも知らないのである。時間は自分の生命でないか。生命なき所に何の時間があらう。一日一月と人は其の生命の立ちつゝあることも多くは知らない。乍然人はいつまでも無限に生きるものではない。

○有限なる人生の一生は時間と生命と同じである、而て一日の過ぎるは自己の生命の一日を過ぎるのである、又一年を過るは即ち自己の生命の一年を失ふことである、然るに人はそれを知らないで只時間のみを徒費してゐる。

○物質は一度失つても又再び得るの機會もあらう、乍然一度失つた時間と生命とは再び永劫に歸る時はないのである。これ私の時間的消費經濟の必要を説く所以である。

○乍然これ何の爲めの時間經濟であらうか。百年の生命も價値なき生活は人生の徒勞である。時間を惜むのは生命を惜むにある而て生命を惜むのは即ち價値の生活に生きんが爲めではないか之私が精神の經濟を主張する所以である。

(念)

目次

△三種の經濟	土屋觀道
△人格主義的淨土教	土屋觀道
△懺悔錄(十八)	演阿彌
△事變と宗教	土屋觀道
△吾朋便り	
△醒めよ宗教家	松生浦

人格主義的淨土教(三)

厭離穢土欣求淨土に就て

土屋觀道

眞に佛教を知り佛教を信じたいと思ふならば先づ私共は其の佛教の如何なるものかを知らねばならぬ而て其の佛教の如何なるものかを知り度いと思ふならば、私共は先づ自分の勝手な臆測や解釋を離れて佛教そのものの説く所の佛説を研究し、それによつて信仰をも立てねばなるまい。然るに今日の多くの人は未だ是等の用意も施さないで、直に世間の俗説や自分勝手な憶説を以て佛教そのものを評し去らうとする傾向がある。これは大いに注意せなければならぬ所である。而して茲に論じやうとする厭离心(厭離穢土欣求淨土の心といふ意を略して厭离心といふ)に就ても多くは往生を死ぬることかの如くに誤せる人のあるが如きいやな意味に解してゐる人が多いことは實に遺憾の極みである。

尤も厭離穢土欣求淨土といふことは汚れた此世を厭ひ離れて汚れなき彌陀の膝もとに往き度いといふ意味の言葉であるが之を消極的に見るか積極的に見るかの相違によつては其の宗教生活の上に於て實に大なる相反の影響があるのであれば私共は此の一點に於て最も大なる注意を要するのである。況んや未だ厭欣の字義も知らずして之を徒らに云々し之を惡しざまに語るが如きは人類社會の正しき向上發展を妨ぐることも更に大なるものがある。夫も佛教を信ぜない人ならまだしも、已に佛教を信ずる人、殊に淨土教徒ならざる人々ならば仕方がないが、已に自ら淨土教徒であると思ひなせる人々であつて而かも此の厭欣の心に就て大いに誤まつてゐるといふことはむしろ忍び難い所である。かくてはとても永劫に如來の大悲も現はれず、人類の淨き世界も又永遠に來ないことになるのであらう。されば決然上人もこ

のことを如何に愚昧のものといへども念佛の行者たらんものはまことの念佛の申されんほどには研究せなければならぬよしを述べられてゐるのである。而して之は少くとも眞剣に自己の眞生を要求する人々には當然に起つて来るべき事柄である。然るに今日の人々は是等のことに對して餘りに輕卒に失してはゐないであらうか而かも色々其の説を異にし、其の考へを誤まつて眞の佛教に離れてゐるといふことは私共の更らに遺憾とするところである。

然るに一體言葉といふものは割合に其の眞實の意味を充分に現はし得るものではないのであつて、初めから其の言葉のみによつて其の眞實を知らうとするのがまちがひであるけれども乍然今日の如く眞に自ら信するに足る程の靈的人格者の居ない時には暫く之によるより外には別に仕方がないのである。乍然其の言葉の意味といふものが其の人のとりやうではどんなにでもとられる場合があり或る場合には全く反對の意味にさへとられる場合があり、又同じ佛説でありながら、一面全く相反せる言葉として表はれてゐる場合があるのを以つてすればかゝる言葉の意味に對して私共は其の何れに依るべきであるか大いに惑はざるを得ない所があらう。而して厭離穢土欣求淨土の如きも亦其の中の重大なもの、一である。私は今暫く古人の信仰若し學說の上に表はれた此の厭欣心に就て一往の説明を試みると共に私の見解と信仰とをも述べて見たいと思ふ。

然るに此の厭離穢土欣求淨土といふことは其の人の見やうによつて消極的にも積極的にも見られ、又社會的にも非社會的にも見られ、又人格的にも非人格的にも解せられる傾きがあるが一般の佛教徒殊に今日の多くの人々には主として之を消極的非社會的な宗教の思想とし而かも之を以て非人格的宗教であるさへ解せられてゐる有様である。乍然之は果して佛教の正しい見方であらうか、尤も佛教の一派に於ては此の土は穢土でなくしてそのまゝが淨土である(娑婆寂光土)とするものあり、一切を悲觀せずして此の世を人類向上の學校であり修行地であると思ふ、此の身を即身成佛、若し是心是佛として最も積

極的に見て、淨土思想の厭離穢土欣求淨土を否定しやうとする傾向の思想もあるが又一方には夫れは醒めたる人、即ち已に其の人に於て解脱を得た人に於ては或はさうかも知れんが今現に社會の實生活に立つてゐる現實の上には此の世は決して理想の世界ではなく寧ろ厭ふべき世界であり、此は決して永劫の理想生命ではない、吾人はどこまでも此の世以上の理想世界を求め此の身は現在以上の自由身の世界を求めてやまぬものであると前者に反した考への人もある。斯くて二者相反の思想は已に佛教思想の中の二大潮流をなしてゐる傾きがあるが佛教徒ならざる人々の間にも此の二つの系統は今尚流れてゐるやうである。而も之を古來の歴史に見、又自己自身の心の上に望みても此の二者の流れはあるやうである。從て見やうによつては自分一身の上にも此の世は不自由の世界であり、汚れの世界、私利私慾の鬭争の世界、厭ふ可きいやな世のやうにも見へる時があり。さうかといへば此の世に實に自由の世界であり、光明の世界、理想の靈界、慈愛に充ち満てる和樂の淨土であるかの如くに感ずる時もあり、さればといつて此の兩者の何れでもないかの可も無く不可もない平凡の世界であるかのやうな時もあり、或は二面混交の世界であるやうな時もある、私共は其の何れによるかを感ずる時度々であつた。

乍然かゝる見方は私共の所謂一つの見方に過ぎないものであつて、夫れは宇宙の實相が固定的に消極的若し積極的世界であるのではなくして、此の世に住める人々の境遇によつて色々に感ぜられるに過ぎない世界であるともいへるのである。乍然斯くの如きは私共が誤まつてそんなに感じてゐるものか夫れとも其の人其の人の業によつてそんなに感ぜまいとしても感ぜざるを得ないものかといふことは更に考究すべき餘地が充分に残されてゐるのである。乍然夫れは一つの理論問題に過ぎぬものであつて、目下自身の實際生活は其の何れに屬して居るであらうかといへば私共の要求に於ては娑婆即寂光土であり即身成佛、是心是佛であり度いは山々であるけれどもそれは現在の望みであつて其の實生活そのもの、現世はやはり不自由の世界であり聚惡の娑婆界ではあるまいか否少くとも如來を離れたる人類の生活には

確かに罪惡生死の流轉の世界ではないかと思ふ。否、少くとも自らの行動を靜かに反省し、人類生活の理想改善を豫期しやうと思ふ人にして此の土を現在のまゝで光明土であり、理想地でありと云ふ人もあるまい。さうして又娑婆即寂光土といひ、即身成佛、是心是佛と云ふもかゝる意味での佛であるといふものはない、從て如何なる人といつても現在の自己と其の周圍に於て十全の満足を感じるものではない限り、其の完全でない自分と其の周圍とを厭ふて來る可き理想の世界を欣び求むるといふことは亦人情の自然といはねばならぬものである。されば凡そ此の世の人にして少しでもよくなりたいとの向上の心のある限り一人としてこのまゝでよいと此の世を是認する人とはないはずであり、從つてこれ等の人々には自から厭穢土を厭ひ離れ、淨土を欣び求むるといふことは決して消極的でもなく又非人格的行爲であるといふべきものではないはずである。唯こゝに一つ問題となることは厭離穢土欣求淨土といふことはかゝる一般的の向上心を云ふのではなくして、それは此の世に於ける向上生活の不可能なることを是認して此の世に於ける向上の心を止め、如來他力の絶對を信賴して彌陀の淨土に往生を求むる所の意味の厭離穢土であり、欣求淨土であるとするにある。從つて此の土を厭ふて西方を願ひ、釋迦牟尼佛を捨て、阿彌陀佛に歸するといふことは一面此の國土を捨てることは其の日本國民たる自分を果たさない所の非國民であり「又三界は我有なり其の中の衆生は我子なり」と仰せられた釋尊に對して其の父たる釋尊を捨て、他方土の佛に歸することは親孝であるといふやうな批難さへも出で來るに至つたのである而て現に淨土教を深く信じた時代、若し淨土教を深く信じた人々には餘りに淨土を強く願ひ彌陀に歸依する結果として自ら此の世の是非善惡や國家社會の改良に心を留むる傾向を少くし、從つて非社會的現實否定の傾向が著しく現はれてゐるのであり、又自ら教主釋尊の存在さへ眼中になくなつて彌陀一佛に專心歸命するに至るのである。故に之を以て厭離穢土欣求淨土といふことがかゝる意味に於て非社會非現實的非活動的であるかに見られるといふことは又止むを得ない處である。否、現に多くの社會の人々に

さう觀せられてゐるばかりでなく己に淨土教を信する人々にさへ、さうだと信せられてゐるのである。

乍然、厭離穢土欣求淨土といふことは、かうした意味を以つて、果して非現實的、非社會的、非人格的宗教であるとして、批難せらるべきものであらうか、若し一步を譲つて、夫れがたとひ、非社會的であり、非現實的であり、現實否定の思想であるからといつて、夫が直に非人格的思想といふべきであるかは、問題である。從つて、之を以て直に非國民的であり、又不忠者、不孝者であると、批難するに至つては、更に反省すべき餘地が充分にあると思ふものである。否、若し私をして云はしむれば、此の離厭穢土欣求淨土の思想こそは、正に人類の歸趨すべき積極的向上主義なる社會的現實的、而かも最高な人格主義の宗教思想であるといふことを信するものである。よし又、それが非社會的であり、非國民的であるからとして、只だ、それ丈を以て人の信仰は、左右せらるべきものではない、何となれば、本來宗教的信仰の要求は現在の社會及國家の狀態に於て永遠の理想を満足し能はない所からして初めて現はれて來るものであつて、必ずしも非社會的、非國民であつてはならないといふ條件のもとに左右せらるべきものではないからである。否、現に永遠の世界、向上の天地を永劫に求めやうとする人々にしてどうして今日の人生五十年の社會及び國家の生活を以て満足せられやう。否、現に私共人生の一生は五十年や百年とすればいやでもおうでも此の社會と國家とは分れねばならないものではないか、されば人の心の永遠の世界には少くとも此の社會と國家とは無視せぬまでも是等の社會と國家によつて永劫に左右せらるべきものではない。從つて人々の信仰を單なる社會的でないといふことや國家的でないといふことによつて之を批難しやうといふことは當つてゐない、而かも之を以て非人格的であるといつて難じやうとすることは、最も注意すべきことだからである。否、若し厭離穢土欣求淨土が此の眞實であり又人生の歸趨すべきところのものであるならばそれこそ宇宙の大道であつて一切の社會と國家とはこぞつて此の思想の宣傳につとめ此の思想の生活に一切を至らしむべきものではないか。然るを未だ充分に言葉

の意味をも解せずして徒らに之を以て非現實的だの、非社會的非國民的だのとの現代的流行語を以て難じ去らうといふことはむしろ其の人々の淺慮と無智とを自ら告白するものとして哀れむべきである。

乍然厭離穢土欣求淨土といふことがそんなに非社會的非國民的のものであらうか、而して今日の現實社會はしかく社會的であり又國家的理想の世界であらうか。殊に現實は單なる社會的若は國家的な言葉で以てのみしかく立派なる世界であるといはれない世界ではないか、現に此の世は生者必滅の世界であり、永遠不死の世界ではない、加之愛別離苦の世界であつて、相愛絶對の世界ではない、如何に相愛の夫婦、若は親子兄弟道友の死別のつらきことよ、而も自身自身の人生の一生が思ふ萬分の一も理想實現ならずして而も病魔に襲はれて此の世を去らなければならないそのつらさは到底このまゝを以て社會的國家的であるからとて満足し得べき所ではない。其他愛を求めて愛し能はざるの時があり、愛を求めて愛を受くることのできない時があり、百年の相愛も時ありて離れ千年の知己も一朝にして別れるの苦しみもある。其他怨恨憎會苦の世界も亦此の世である。或は求不得苦としての求めて得られない苦しみが即ち此の世は不自の世であることを示してゐる。其の此の世が幾何の正義の國であり、又幾何の慈愛に充たされた世界であらうか、弱肉強食、生存競争の現状は之を以て生活安定の永遠の世界であるとはどうしても私共には受けとれない、従つて是等の世界に於て而も私共の努力に於て此の永遠の生命と無限向上の世界とが捷ち得らるればそれでもよいが到底謂所世人の現實の世界では之を得ることは出来ないばかりでなく、自分自身の道德良心も自己自身の行動に對して十全の満足と與へ得るものでない時、私共にはそれでも此の世を以て完全の世界、理想の極樂として之を樂むことがあり得るであらうか、よしそれが又あり得るとしても夫を以て果して正當の觀察なりと見るべきであらうか、我が淨土教にてはかゝる世界を不淨の世界、汚濁の世界として自ら厭離したく思ふのである、而て之が果して悪い考へであらうか。而も夫は單なる自己の利己的厭离心ではない。人誰か故なくして此の世を厭ふ者

とてはない、吾人はあくまでも此の世に於て最善の努力を盡して眞善美聖の全的生活を要求するものである。乍然如何に自ら努力しても此の聖なる生活を自らに實現し得ない時、而かも私等に來るべき死と罪とに一切が被ふはれて自己の生死と罪惡に自らの立つ可き力の盡きたる時、一切は暗黒的絶望の世界となる。此の時忽然として如來の本願を聞き、絶對慰安の靈界を知り、無限大悲の招喚の御聲に接する時誰か此の土を厭ふて淨土を願はない人があらうか、人生絶望の地獄の底から如來大悲の佛陀の淨國に轉入することは恐らくは如何なる凡情愚僕の輩といへども之を厭ふところのものとは決してあり得ないことだらうと思ふ。而も何の爲めの欣求淨土ぞや、決して夫は單なる自己の快樂のみ満足せしめんが爲めの利己主義的發心の動作ではなく、第一自己の罪惡生死の實感からして最も進んだる道德的人生觀から現はれた、人格主義的本心の要求であればそこには一切人類否己に一切萬物の向上調和共生の根本精神を離れたものではないのである。從て彌陀の淨土を願ふといふことは其の結果彼の國に到終つて自らの修行を重ね、其の人格的實力の増すに従つて再び一切人類の救済に全力を盡さうとの根本精神に立つてゐるのであることは決して忘るべきことではない。從て自ら此の世に爲すべきことを知つて爲すことを得ず自ら爲すべからざることを知り乍ら而も自ら之を止むることを得ない時、人誰か此の如來の大悲に心動かない所のものがあらうか。加之私共は如來を離れて本來生活し得るものであらうか、所謂宇宙法身の大悲のミオヤを離れてどこに人生の眞義があらう。從て厭離穢土欣求淨土は一切人類の如來に歸るべき一つの標語に過ぎず、一として永遠の自己に歸るの道でないものではない。謂かゆれば人類本心の向上的歸結である。されば自ら爲し得ることもなさずして徒らに此の世を厭ひ、彼の土を願ふといふことはもとより正しき意味での淨土教の心ではない。

而も私共に斯かる理想の世界が発見せられない限り人生の理想は行きづまりとなり、此の世は僅かに五十年に止まつて永遠の世界は輝かず、無限の理想は打絶つて、此の世は唯淋しい絶望の世界となり終

ることであらう。而て此の淨土他力の靈界、即ち永遠の生命と無限向上の世界とを私共に與へる如來大悲の佛界ありてこそ、始めて一切の人生は光となり望みとなり喜びとなり力となりて來るのである。而て人生の一生は五十年、百年の一生にあらずして、實に宇宙と共なる永遠の一生である。而て此の永遠の世界、不滅の世界こそ、絶體の世界であつて、而も亦此の世界は現實の社會をも悉く抱括して餘すところはないのである。

靜かに想へば現實の社會は宇宙と離れて存在すべきものでもなく、今日の國家も亦宇宙の大道を離れて存し得べきものでもない、然らば如何なる國家も如何なる社會も宇宙の本心たる如來を離れて永遠に存在し得るものではない。從て如來を離れたる人類があり得やうか、西方を以て此の世以外の淨土とし、彌陀を以て釋尊以外の佛であると言いた時代は已に過ぎた、此の世と西方と區別し、彌陀と釋迦とは離れたのは夫は一時の方便である。要は只此の世を離れて如來の淨土に歸すればよい、如來の光明は十方に輝き、如來の御國は遍一切である。謂かゆれば本來私共は如來の光明土に居るのであつた、而て夫れは私共が未だ之を知らなかつたに過ぎなかつたのである。從つて私共は如何なる場合にも宇宙の大道の中にある此の大道を離れては何一つとして存在することはできないのである。而て夫は信と未信とを論せず一切は救の中にあるのである。此の意味からして此の土は衆の爲めには穢土を見れば娑婆を感じても如來の前には淨土であり極樂であるのであつた。故に悟つた人々から見れば娑婆がこのまゝ、寂光の淨土であり、是身そのまゝ成佛の姿であるといふのも決して非眞理な話ではない。乍然之を一般衆生の方から望むれば未だ眞實の慈光に觸れない限り此の世は暗黒の世界、罪惡の世界であつて、決して本心の満足すべき光明の世界ではないのである。茲に於て私共の本心は此の暗黒の世界を厭ひ如來光明の安樂の淨土を願ふて止まないものである。而かも此のことは私共が意識的に自覺するや否やにかゝらず私共本具の自性であつて無意識的にも自ら働いてゐるものである。故に私共の本心は意識的にも無意

識的にも各人に具へた本具の自性として自ら厭欣の心は具へて居るものである。從て私共の心はいつとも正を欲して邪を排し、眞を愛して偽を憎み、醜を嫌ふて美を好みごこまでも聖なることを望むといふことは人類自然の要求である。從て此の思想の要求はやがて宇宙の本心たる如來大悲に歸せねば止まぬ要求であつて、此の如來大悲に歸する時、私共は救はれ永遠の救ひを感じ、無限大悲の光明に攝化せらる喜びを感じて初めて蘇生の思ひをなすのである。而て茲に私共は初め自己の尊嚴を認め併せ一切人類の尊嚴をも認むるに至るのである。而してこゝより出づる私共の生活こそ即ち如來中心の人格的至高生活の第一歩であり、又人類生活の最終であるのである。

されば厭離穢土欣求淨土といふことは斯くの如く人類生活の根共要求であつて、それが即ち最も正しき意味に於ける最も社會的現實の人格的積極主義なる思想であるのである。(二二、一一、七)

懺悔錄

(其十八)

演阿彌

常に清淨にして常に静寂なる如來様よ、誠に活動とは静寂の事です、先験の世界に於ては人間並の經驗的推論を許しません、天災地變の如きも唯だ静寂の一部分で我が如來様は實に永しなへに長閑なのであります、夫を唯だ私達が恐怖し困憊し苦惱する丈なのです、如何なる大活動も大宇宙無量無限の時空にわたる大創造大進化の前には誠にホンの一小些事に過ぎませんでせう、夫を唯だ私達が昏迷し狼狽する丈なのです、噫々實に清淨にして寂光なる天地よ、噫々静寂にして清澄なる世界よ、然し乍ら私達は何故に斯くの如く恐怖し困憊するのでせう、何故に昏迷し惑亂するのでせう、夫は私達人間の當然の收獲だと云ふのなら餘りに無理解無反省の言葉です、けれども能く能く考ふれば其恐怖し昏迷するが故に却て多くの教訓となり反省となり懺悔となり覺醒となるのではありますまいか、然らば私達生きたる者こそは實に大なる

恩寵の中に育まれて居るのです、噫々大なる如來様の中には一切愛憎の念を絶して然かも至極大愛の抱擁を止めないのであります、然様です、無相無作の中にこそ大秩序の根底があるのです、大生滅の中にこそ本不生の眞諦があるのです、噫々驚く可き客觀にして而も驚く可き主觀の世界よ、其處には認識する者と認識せらるゝ者とが合一して居るのでした、私が今上人御指導の下に如來様御名の中に此の大發見を致しました事は先覺者に取つては實に大なる驚きであります、然し愚なる私は「神に於て生く」とは知り乍ら「神に於て働く」てふ謙敬にして剛毅なる宗教意識に成り切る事が出来ません、私は思ひます此の心なしには私達の自覺を高からしめ私達の智見を深からしめ私達の活動を強からしめ私達の人格を完からしむる事は出来ないのではあるまいかと、しかも私の上には從來よりの惡遺傳と惡習慣とが附隨して居るが故に夫が時處位に應じて常に擡頭しては更でもの私を裏切つて居るのです、之畢竟自覺體驗の低級さ

を物語る者です、嘗て拔隊禪師は斷言して居ります、『本覺眞如の妙性は地位階級を絶すと雖も學者の根柢不同なるが故に始覺暫く淺深あり、先に所謂智見洞然明白にして理體の會する處は未だ實悟に非ず、唯だ是光彰あるが故に門外の客とす、』と、是れ實際眞理の語であります、然かも私にはまだ々々「如無所得の理がハッキリして居りませんから何麼しても彼の所得慾から絶縁されないのであります。だから前述のちつぽけな宗教經驗でもごんなにか其再現をそゝのかした事でせう、ごんなにか其再現を祈らせた事でせう、かうなれば之も亦た一種の魔境ですね、然し是は私許りではありませんでした、古來から多くの先覺先德が矢張り苦杯を嘗めて居られるのです、先德方は其處を切抜けられましたのに私は唯だ其處にウロウロして居るのです、是はごうしても又是聖道化と云はれるかも知れませんが『等妙二覺を坐斷す』底の甚深般若の體驗なしには到底駄目なのではないでせうか、私も夫は其後時々清淨無垢な自分を念佛の中に見出しましたとは云へ、夫は所謂化

城であり胎宮であつて私の望んでやまぬ自覺其物の上には別に些したる功果をもたらしませんでした、『南無阿彌陀佛聲は朗に澄み行きて獨り眺むる世とぞなりける』とは其頃の實感であります、夫は唯だ二乘地に過ぎませんこん、な事で満足があり得ませうか、其處で私は色々惱んで見ましたが、噫々耻づ可き哉、愚かなる私は窮餘敵本的利他行と云ふ事を眞面目に考へたのでした、即ち私のよくなる事は他のよくなるに限り駄目であるか、他と云ふ自利回向的利他行を專念致しましたのです、理屈は成程合つて居りませう、然し其心裡を分析する時夫は實には菩薩心を假面にした醜い醜い聲聞根性からなのであります、夫は醜い功利的な精神に依つて誘はれたものです、然し當時は是を立派な純粹無雜な菩提心だと思ひ込んで居りました、無智は仕方のないものです、ですから南無阿彌陀佛々々と一心に稱名し乍らも「無理を御願ひしたとて聞いては下さらないさるにてもごうしたら早く他がよくなつて呉れるだらう」なぞ

ど如来様への眞剣なる南無の心は段々に横道へそ
れて行つたのであります、こんな有願無行が何に
なるのでせう、彼の道元禪師が『何だ蛙の様に』と
罵つたことや云ふ事も全く無理はありません、
私達の念佛はともすれば有願無行はまだしも無願
無行の鮎念佛に成り終つて居る事が度々あるでは
ありませんか、本當に情けない事です、然も御念
佛を離れては無水池の鮎と一般全く手も足も出は
しません、理屈では成程南無佛の念佛が救我以上
に度我の願行として私達の宗教意識に上る時、夫
は全く稱名丈ですまされませんでせう、事實朝か
ら晩迄毎日毎日木魚を叩いたとて社會的には直に
何の功驗も見えませんから、『社會の一員たるの
務もなし得ないで何の人格ごころか』とも云へま
せう、然かも眞實の念佛は社會の一員としての務
ごころか社會指導の權威に立たんとこの本願の上
に行せられる限り、無論利他行としての色々な事も
必要でせう、併し社會奉仕だの社會事業の爲の社
會事業だなど不徹底な事を云ひ乍ら而も賣名に
のみ汲々たるの醜さが、ともすれば私達の心の中

想に就ての返事は後ですが十月の勢至堂の別時
には是非参加する様に』との事のみでありました
のと、今一つは私達の隣村から出た聖人晩年の門
下生I様から『母子して見佛したと師上人様から
ひそかに御話がありました、御母様の唐澤での有
様は私も同座して親しく見聞致しましたが、貴君
は何時何處で如何なる状態でありましたか知らし
て下さい』との御手紙がありましたので、幾分聖
人の御心持丈は推せられました、I様に對して録
な御返事を差上げませんでした事は誠に申譯のな
い事で御座います、然し夫はI様が御満足下さる
程度の發表を少し躊躇しましたからであります、
聖人から御返事のなかつたと云ふ事は亦た同様の
意味に於て最も適當な御處置でありましたのでし
た、然し眼くらめてゐる私は物足りません、何
とかして御返事を承りたいものだ、然様だ、之は
勢至堂の御別時に御示教して下さるのかも知れぬ
と思はざるを得ませんでした、噫。さるにても待
遠しき十月十六日よ、私は實に待ち切れない程待
遠しかつたので御座います、之は實際悪い私の癖

にも有りはしないか、もしあらば全く以て無願無
行の鮎念佛にさへ劣るものであると痛感せられま
す、今ま云ふ所の敵本的利他行は、まさかにこん
なひどいものではありませんが少くとも耻づ可き物
である事を失ひません、事實醜さは矢張り醜い
ですが然し其醜さを補ふ程の純眞さはありました
かと存じます、とは云ふものゝ其如何にすべきか
の點に至つては全く其無力無智を暴露して彼の社
會奉仕連に劣る事幾段なるかを知らずと云ふ有様
です、茲に至つては終に是れ進退谷より外はあ
りません、傳へ聞く古へ道綽禪師は善導大師に己
が人格成就の可能を尋ねられましたとか、『よし
私も之を聖者辨榮上人に御尋ねして見やう！、聖
人程の豊富なる體験を持たれる方は當代に於ては
實に稀であらうと思はれる、然様だ、幸ひ母が十
八日からの唐澤別時に行きたいと云つて居るから
母上に言傳して頂かう』。かう思ひましたので最
近に於ける所得感想を十數枚かに認めて聖人の御
示教を乞ひましたのでした、然し乍ら御返事は有
りませんでした、唯だ母への傳言として『念佛感

で思ひ込むと納得する迄は衝き留めたいのです、
私は本當に藥罐消炭主義です、早くジーンと云つ
て煮けて仕舞度いのです、朝に道を聞いて夕に死
すとも可なり、煮ねさへすれば命なんぞは入りは
しません、是れ利己主義です、而して夫は終にあ
せりとなり藻掻きとなつて自らを毒するかも知れ
ません、實際危険性を帯びて居ります、圯庵老人
は云つて居りました、『佛法の大海漸く入れば漸く
深き事を知る、聖胎長養悟後の修行實に容易に非
ず』と又曰く『假令大悟現成し法身明了なるも修
功に染汚すれば佛道 前せず、向上更に又向上の
事あるを知るべし』と、噫々學人の前途漠々として
天際頗る遙かなりと云ひつ可きです、『須らく證上
に修ある事を知て潛行密用西來の祖道を保任す可
し、錯りて所得の見を存し永く守藏の窮鬼有財の
餓夫となる勿れ、佛國土を現成し佛境界を見得す
るも一見して再見す可らず』と果して私の如き既
一退よ、而して念佛難信の法また決して安て樂道
とは云ふ可らざる物あるか！(續く)

事變と宗教

土屋觀道

今回の關東震災は、私共にとつて強い各方面の影響を與へたことは殆んど近來に無い出來ことであつた。

それに就て震災に對する場合と

火災に對する場合、及び其の當時と今日と將來に於ては社會の經濟的變化、若しくは道德的觀念、或は思想、信仰の變遷動搖推移に關する問題は際限もなく現はれて來るのであるが、之等は各々互に相關連して進み行くものであつて、只一概抽象して論ずることは決して出來ないものである、從て是等に對する一々の觀察と其の總合的批判とは現に變りつゝある今日の社會問題としては決して容易なこと

ではない。

乍然宗教が斯かる事變に對して如何なる影響を與へ又將來如何なる影響を與へるものであるかといふことは大いに教へられる所があり、中にも其の間に於て、信仰のある人と信仰の無い人の差異

に就ては最も著しい違ひであつたのであるが、尤もかゝる大震災火災は餘りなかつた人々の想像さへ及ばない處であります、之を以て之を觀れば如來の慈光は如何なる時にも處にも遍一切であるとはかねて云ふ處であるが寧ろかゝる事變に際してこそ一層強く深く顯はれて來るかのやうであります、之に反し

いことであるが夫れ等の多くは唯

不自由を歎かない人としては無い自由と權利とを主張することの

やるせなき痛歎のものが多少と

強くして人の自由と權利とを認めざる見えない人としてはありません、さうかと思へば自ら罹災者に身な

而も夫ばかりではない、今日及び將來に對しても靜かに自己の前途を反省し來るべき將來に眞實の生活を實現しやうなど、考へて居る人々は幾人あることでありませう、之等の人々は絶望の淵に此の身を惱まし、何等とるべき將來の方針も立たずして自殺さへする人があり、さうでなくとも多少過ぎたる自分の不幸を悲しんで今日の

賣に手を出し或は失つた財寶を一時に盛りかへさうとしてあらゆる不義不徳をも更らに意とせない人仰ある人々の之等に對する生活は

の自己の發展を確立しつゝあると
いふことです。

此の點から見るとは信仰ある
人々の災害は其の物質的損害から
云ふならばもとより非慘愁傷の極
みであります。此の與へられた
幾多の教訓的體驗は其の順逆の
如何を問はず正しく精神的には一
大人生の革命期にも接したる恩寵
といふべきです。

之に反して震災を免れた人々が
それを以つて自らの幸福かの如く
に感じ、僅かばかりの震災に對す
る同情を以つて如何にも大佛心で
も起したかの如く考へ、或は形ば
かりの慰問袋に自己の慈善心を満
足して、食ふに食なく住むに家な
く、着るに衣なき同朋の非慘をも
痛感せないといふことは決して其
の人の人格向上の精神に於て幸福

なる人とはいへないことでありま
せう、まして、東都の震災を以つ
て單なる諸行無常と教へ。或は單
なる自然の天刑かの如くに感じて
現實を否定しやうとするが如きは
最も私共の謹まねばならないこと
かと思ひます。信仰なき人々の身
の上にかゝつた天災は暫くおく、
乍然少くとも信仰ある眞人の生活
には實に驚くべき靈的革命的第一
期として現はれて來てゐるのであ
ります、實に恐るべき人心の緊張
した此の自信ある如來への目醒め
こそ最も私共の俱に學ぶべき所で
ありませう。(一一、一二、一八)

◇吾朋便り

今回の震災に就て
神谷善之進

「をや地震だ」と氣附や否やガラス
はバシャンと落ちて來た、机がたを
思つたら表の方で悲鳴の聲、七階
作りの銀行が今にもつぶれるかと
許り本能的に半ば無意識に預口の
處迄來てゆられつゝ、御念佛もです
立つて居りました。其うちに地震
がすんでほつとして通りへ出て見
たら人が一パイでした、ゑらいほ
こりでむせつたい潰れた家、けが
をした人、何と申てよいのやら、
阿啞今の今迄東洋一と言はれたき
れいな都もめちやめちや、我々は
如何なる場合に死せんも知れず南
無阿彌陀佛とやうやく念佛が申さ
れました臨終正念御來迎ありがた
う御座います南無阿彌陀佛と往生
することは御はづかしい次第です
が此際私共は落第でした。腰か足

かをぐつしやりとやられでもして 宗教は死後許りの御救にあらず現二、十、十二)

蟲のいきで生きて居たらばその御 實の御救ひもありがたいことだと
念佛も出たかも知らないがとにかくしみ／＼感謝されました。死はた

醒めよ宗教家

松浦生

く御はづかしい振舞でした。是はとへ地震や火災でなくとも一度は 宗教家(僧侶)の今回の災害に就て
私が日本橋の加島銀行で地震に會 必ず來ます愛別の苦痛は其緩急の 遭難者に對し、應急の救済として
つた時の事であります。 差こそあれ今度私共の見せて貰つ 物資の供給に盡力された事は、實

次に今回の大事變に會ましてまたありさまに大差なきものと存じに結構な事である、然し姑息なる
のあたり見せていたゞいたことは ます乍然大悲御親の御慈悲に信順 物資の供給は反つて有害無益であ
一心十界の相でありました、乍然し念佛は一の信仰に入り永遠の生 給は程度問題である、一面同情な
此悲惨なる出來事に際しても我が 命を得さして貰へば將に平生業成 給は程度問題である、一面同情な
幾多の道友が如何なる境遇に立ち として私如きあさまい下凡愚劣 給は程度問題である、一面同情な
でも單なる苦の一面許りを見すし の者迄もなを以て御救ひは間違ひ 給は程度問題である、一面同情な
て常に苦痛の中からも歡喜の一面 はない念々靈化の御育てあれば 給は程度問題である、一面同情な
を味識して望みと喜びとの生活 このばまゝが感謝の稱名ともなる いと考へられる、遭難の方々よ、
に生ける事實を見るにつけ、愈々のであります。南無阿彌陀佛(十 今回の如き災害に遭遇してこそ自

らの精神を試練すべき時である、
又自らの運命を開拓すべき時では、
ないか、平素の修養もかゝる時に
こそ必要である、然るに此の時物
資にのみ依つて其人を饒遇するこ
とは考へなくてはならない、それ
が爲め反つて依頼心を強からしむ
る事は恐るべき事である、宗教家
として思想を振ふべき立場にある
ものは其人達に再び奮ひ立たしむ
べき自覺強き信念を起さしむる事
が尤も必要である、そこで此機を
逸せず其人々へ強く生くべき根底
たる信仰心を布及してこそ眞に永
久に其人々を生かす力であり眞の
救済である、人心の悪化せんとす
るとき目今の急務として物質供給
も必要なれど宗教家として精神的
救済に盡力して頂き度いと思ふ、
僅かに託鉢して物資供給の御取次

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十二年十一月十九日印刷納本大正十二年十一月二十日發行（毎月一回一日發行）第二卷第十二號

◆讀者諸兄に告ぐ

眞生も今度の震災を中心
として一層新生の氣分に若
返つて新たに立ち度う存ま
す就ては誌料未納の方々は
此際一層の御同情を以て至
急御送附を御願いたします

眞生社

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯人 土屋 觀道

發行所 眞生社

東京市芝公園第十四號地九番

印刷人 三井 清三

東京市芝公園第十四號地三番

印刷所 玄々堂印刷所

東京市芝公園第十四號地三番